企業と倫理

横田周作

ここ数年前から公害問題について企業の責任が問われるようになって来ていたが、昨年からは大商社を中心として、物の買占め売惜み等の価格操作を原因とする異常な物価上昇に対し、企業の責任が追求されるようになり、特に最近は石油危機に便乗した先取値上過大値上による経済界の狂乱と消費生活えの圧迫に対し、企業の責任を追求する声が高まっているのは御承知の通りです。国会でも大企業の社長連中を呼出して質疑を行い、表面的には各社長ともその責任を認め、陳謝の態度をとっているが、その言葉の端々に何となく納得のゆかない気持が表われている。その気持を推測すれば、彼等の考えの根底には『価格は本来需給の趨勢を通じて定まるのであり、各自が自己の最大の利益を追求して行動すれば、見えざる手の働きにより、自然に価格は落着くべき処に落着くものである。需給の関係で大きな損失を出す事もあれば大きな利益を生じる事もある。企業の経営責任者として自己の企業の最大の利益を求めて努力するのは当然ではないか?』と云う自由経済の基本的思想があると思われる。此れは小規模の多数の企業が完全な競争状態にあった場合には、それなりに正しい考え方かも知れない。

然し現在に於ては、小数の巨大企業がその業界の大部分の分野を占め、独占禁止法の制約があるにも拘らず、販売カルテを行ったり、又業界のトップ企業が価格面で先導的役割を演ずる事例も多い。一方大商社はその巨大な金融能力により流通面で実際的に価格を支配し得る力を持つに至っている。此の力により競争を制限し、自己の望むままに価格を形成し得るのだと一般に考えられるに至ったので、現在のような異常な価格の上昇に対して、企業に責任があり過大な利益は社会道徳に反するのだと云う考え方が出て来た訳である。

ここで『経済的行動について法に反しないだけでは不充分で、更に倫理性も必要である』と云う思想が表れてくる。

此の問題について、私は〝社会的分業〟と云う基本にさかのぼって考えて見るべきだと思います。社会的分業は数千年の歴史をもって居り日本列島でも縄文時代後期には既に始まっていたと考えられているが、分業とは本来『技術の進歩と生産性の向上により共同社会の経済生活の改善に役立つ』ものとして発展して来たのです。此れが産業革命以後は動力と機械利用による工場生産となり、生産活動が個人から会社企業に移ってきた。更に電気及電子技術の進歩に伴い現在のような大量生産オートメイションの大工場生産に移行して来たのであるが、やはりそれが複雑化し拡大された分業の一形態である事に違いはないのです。

現在では、企業はその内部に多くの人員をもち、それ自体分業形式の共同社会の性質を有し内部的には規律と徳義を守っているが、一方外部に対しては、利益のみを求める利己的集団であるかのような観を呈している。此れは企業が〝社会的分業〟の一部である事を忘れたものと云わねばならない。

今や、企業とその構成員に対し、その活動の社会全体に対する倫理性が要請されつつあるが此れには、社会的分業の本来の意義に立帰って深く反省すべき時であろう。　日輪ゴム工業（株）副社長

哀悼　木畑チカさん

本部幹事木畑竜治郎夫人チカさん、去る七月二十八日突然逝去されました。享年六十九才。誠に哀惜に堪えません。チカ夫人は辰巳会の開催ごとに絶えず御出席になり、巧みに夫人会員の誰彼なしに仲を取りもたれ、和かな雰囲気に会を盛りあげて頂いた蔭の力の人として、一層惜しまれてならないものがあります。

謹んで御冥福を祈るばかり……

山も河も裂けよとばかり哭く涅槃

（編）

父を語るの記

柳田義一

「かね辰」の暖簾

昭和二年のパニックは、鈴木商店を破綻の悲運に追込んだ。これを知った父は、病床に座して厳粛な面持で私に語った。

「金子さんとの一生を賭して自分の事業も、どうやらこれで終りにきたようだ。難かわしいといえば泣きごとになる。しかし将来あるお前達若者にとっては、またこれが最上の試金石ともなるだろう。悲観は絶対禁物だ、截られた幹から楠のように芽のふく日もある」

今も耳朶にこびりついてはなれない言葉である。翌三年二月九日、父は事後を金子翁に託し六十二才をもって世を去った。通夜の枕辺にかけつけた金子翁は、「お前のお父さんとは四十年もの間、口喧嘩一つしなかった」といって慟哭し、よね刀自も「人にさからうことなく、几帳面な素直な生涯を店の為に捧げたよ」と涙を落された。

父は慶応三年八月三日、大阪鰻谷侠商辰巳屋松原恒七の長男として生れた。十三才のとき、叔母はるの婚家先である柳田卯兵衛の養子にもらわれたが、六年後の明治十八年にふとした手違いから養家が倒産した。ときに父十九才。卯兵衛はそれまで前記辰巳屋で習得した輸入籐の商売をしていた。

復興見込立たずとみてとって、父はかっての辰巳屋の暖簾を神戸で継いでいる鈴木商店に入り、初代岩治郎夫妻の鞭韃のもとに砂糖売り込みに専念した。当時鈴木商店は栄町四丁目元岡部印刷の裏通りにあり、父[illegible]妻を親のように敬慕していた。父が鈴木商店に入った翌年、土佐から金子直吉翁が迎えられ、樟脳の販売に従事された。これが金子翁との終生管鮑の交りをなすきっかけとなり、互いにいたわりいたわれつつ商売に励んだ。

明治二十七年、杖ともすがる主人岩治郎氏が齢五十四を一期として逝去された。忌明の親族会議では杞憂するところ多々あったが、器量人たる刀自は心乱すことなく、父と金子翁とをよんで厳然と申付けた。

「お前さんたちに店舗一切を委かす。以後は「かね辰」の暖簾を傷つけぬように継いでおくれ」よね刀自四十三才のとき。金子翁二十九才、父二十八才、二人は手放しに泣いて先代の位牌に契い線香をたむけたという。

こうして鈴木商店は金子、柳田のコンビでスタートをきったが、幾多の辛酸をなめた幾日が流れた。ときあたかもわが国運は黎明を脱しつつあり、神戸の発展もいよ〳〵これからという段階に入っていた。商売の方も漸く軌道にのってきた。明治三十五年十一月三日天皇誕生日をトして資本金五十万円を以って〈合名会社鈴木商店〉を創設した。出資金、鈴木よね四十八万円、柳田冨士松一万円、金子直吉一万円、と云う内容であった。本店を栄町三丁目今の山下汽船北向いに移した。砂糖、樟脳を基盤として多くの商品の国内販売はいうに及ばず、取引を国外貿易にも及ぼして順調に盛運の足どりをかためた。

レンガ砂糖と海上保険

まず、ときの台湾民政長官後藤新平氏の知遇を得、福岡県大里（現在の門司市）に製糖所を設け、のちに大日本製糖にこれを売却して同社の一手販売権を獲得した。また神戸小林製鋼所を買収して神戸製鋼所となしこれを経営、さらには台湾に樟脳専売法が施行されるやこれの一手販売をも命ぜられる等、好条件に恵まれて破竹の勢いで進んだ。

今ここに、それらの詳細を書くことは紙面を許さないが、大里製糖所開設当時には「レンガ砂糖」の挿話が残されている。砂糖製造と云っても当時としては何分手慣ない仕事のことゆえ、斉藤某という技師が精製に失敗して、レンガのように固った砂糖をつくってしまった。これが工場内のいたるところに山積されてあると云うので、その仕末に困った父が、熟慮の末、単身上海に乗り込んで中国でさばこうというのである。いかに中国といえども、レンガのように固った砂糖では見向きもしまい、そこで勤直な父にしては奇抜な知恵を絞った。当時通用の五銭白銅貨があったが、これを幾枚か砂糖に投じ、上海在住の阿東（アドン）という砂糖仲介人に会って「今度鈴木から積込んできた砂糖の俵にどうした事か五銭玉がはいっている」と中国人仲間に吹聴させた。これが効いたか思わぬ反響をよんで、またたくまにこのレンガ砂糖がさばけ、父は凱歌をあげて引揚げてきた。

ところが内地にあった金子翁もさるもの、父の不在中、精製失敗の原因を探求され、砂糖にはビスコと云うものを加えなければならないことを知って、父の帰国時には真白なサラサラした砂糖を造っていた。そこでこれの製造を日産四百トンに増し、鈴木の砂糖販売が全国に網をはるようになった。ちなみに現在まで使われている砂糖の銘柄記号は、すべて父によって名付けられたものである。

元文相、平尾釟三郎氏にいわせると、父は関西に於ける事業発展に最大の効果をあげた一人だということになっている。これは鈴木の砂糖部がまだ **扃** 鈴木洋糖店と称していたときのこと、当時平尾さんは東京海上保険の大阪支店長をしていて、父との親交もきわめて深かった。あるとき父が北国のある得意先の荷物に荷主には内証で保険を付けておいたことがあった。

今日、積荷に対して海上保険を附することは商人の常識で、茶飯事にひとしいものであるが、その頃は田舎で保険のことなどいくら勧めても、馬の耳に念仏でなか〳〵きき入れなかったものである。しかし海上保険の必然に迫られていた父は、いつもＦＯＢで得意先に売るようにして、実はＣＩＦで仕切っていた。その積荷船が遭難してものをいったのである。北国の荷主が運搬船沈没の報らせを受けて青くなって飛んできたのも無理はない。彼はその荷物に全財産をかけていた。はるばる汽車に揺られて神戸に着くなり、鈴木の店に馳せ参じた。が、彼を待っていたのは、意外にも彼が投じた資金以上の、利益をも見込んだ保険金であった。この破天荒の処置が効を奏して、北国の商人仲間には大評判となり、平尾さんと父が互いにその営業振りの大宣伝をなした。北国の荷主から贈られた当時の記念品は、今尚鈴木家にのこっている。

籐椅子の上にてひる屁

世話好きの父を語るにこんな話がある。

明治四十三年、六甲深田に住んでいた頃、隣に日本商業会社（のちの日商岩井）に勤めておられた足助太郎氏が住んでいた、ところがどうしたものか、足助夫人彰子さんと鈴木専属の名医、順生医院武藤百太郎氏とは平生からウマがあわない、ある時彰子さんが大患に冒された。夫君の心痛ひとかたならず、武藤先生に往診を促すこと数回に及んだが、中々聞き入れてくれそうにない。とう〳〵困りぬいて父のもとに泣きつかれた。そりゃ大変だというわけで順生医院に馳せ「今あなたが往診されることに依って一度に二人の患者を癒すことの出来る病家がある、ぼくと一緒に行ってくれませんか」と云うと、武藤先生も剛腹だけに「これは面白い、さあ行こう」と鞄を抱えて父についてきて驚いた。虫ズがはしるほど嫌いな家だ、

父に約した手前、武藤先生帰るわけにもいかず、そこで臨床手当を施されたが、医は仁術、これがきっかけとなって夫人は快方に向い双方の不和も直り、愛妻家足助氏も蘇生の思いがしたと云う。

籐椅子の上にてひる屁は亀甲型

これは父が当時の月刊雑誌「東京パック」に投稿して賞品を獲得したへなぶり（川柳の一種）の一句である。

天衣無縫の金子翁とは違い、父はいつも女房役といった方の仕事をきりまわしていた。従って金子翁とは性格も変っている。鈴木商店最古参の重役谷治之助氏が、この二人を評して次のような思出話を語ってくれた。

東京日本橋に「島平」という商人宿があって、これが店の定宿であった。「島平」の親爺はたいへんな頑固もので、おてつという一人娘があったが嫁にもやらず養子もとらずに、その頃その娘は三十才余りになっていた。ある人が「島平」の親爺に向って冗談に「金子さんと柳田さんとくらべて、もし養子にするとなるとどちらをとるか」とたずねてみた。すると「島平」の親爺は即時にこう云ったそうだ「もちろん柳田さんにきまっている。金子さんでは果物代で身代がつぶれてしまう」

以前、酒豪のほまれ高い岡　烈氏（大正生命社長）と金子さんが同宿した折、金子さんの果物代が飲ん兵衛といわれた岡氏の酒代を上回ったことがある。それを思出してのことであろうと……。

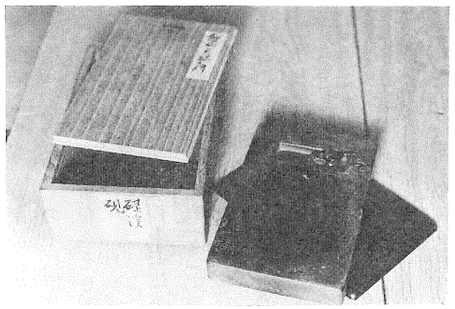
コツは尊い知識である

私の家の家言らしいものはといえば、祖父恒七からはじまっている。恒七が父の義兄藤田助七氏や初代鈴木岩治郎氏にいい残したものだが、私も父からそれをいいきかされた。

「商売のコツは腕である。これは教えて教えられるものでなく習って習えるものではない。いくら資本があっても商売が繁昌するものとばかりはいえないのだ。丁度金持の親が息子が店をもつのに、惜しげもなく多くの資金をおろすのに似ておろかなこと、息子に腕がなければ、息子は資本金ばかりをあてにする。金が無くなると泣き顔になって、信用とか誠実を忘れ腕を磨こうとしないものだ。

商売にはつねに相手がある。相手は生きていることを知れ、取引には千変万化で機微を察するに細い心と決断を得る度胸が必要だ。その時にこそ[illegible]知らずの間に苦労して覚えた商売のコツがものをいうのだ、コツは尊い知識である」

昭和二十四年二月、金子翁と父冨士松のために生前とくに親交のあった、高畑、金光、長崎、久村、田宮、杉山諸氏の肝入で市内灘区篠原禅宗祥竜寺山内鈴木よね刀自の胸像に隣接して頌徳碑が建てられた。除幕式には鈴木関係有志知名士百名が参列され、盛儀をきわめたことは今尚感謝に堪えないものがある。香爐読経静かに洩れる山内、松の色いと濃く鳥瞰図の如き神戸市街を見下ろすとき、大港都の繁栄と直前見える在世当時ゆかりの神戸製鋼所の林立せる煙突に、不世出奇才の金子翁も父もとも〴〵に莞爾と微笑をたたえ、永久にこれらを護りつづけていくことであろう。

触先を深く容れて憩う緑蔭に

▼ 鈴木よね刀自ご愛用の硯